新型コロナウィルス緊急事態宣言下における成人看護学実習(周手術期)の展開
－学内実習内容と学生アンケート結果の報告－

石塚　睦子[1)]，正藤　倫音[1)]，小室　早苗[1)]，山内　麻江[1)]，水田　進[1)]
了徳寺大学・健康科学部・看護学科[1)]

要旨

2021年9月に3年生42名は3週間の成人期看護学実習(周手術期実習)を予定していた．しかし，新型コロナウイルス緊急事態宣言が出されたため学内実習となった．対象学生は，2年時の基礎看護学実習も臨地で実習ができていない．そこで，学生の学習内容を精選し，目標を達成するために展開方法を工夫した．学習の順序は，術中・術前・術後の流れで行い，学習方法は，DVD学習，講義，教員の役割演技によるデモンストレーション，グループワークおよび発表などを取り入れた．その結果，学内の落ち着いた学習環境で，学生は理解を深め，周手術期看護の重要点について学ぶことができ，目標の達成度と満足度は，学生から高い評価を得ることができた．

本論文では，学内での学習内容・方法に関するアンケート調査結果と今後の課題を報告する．

キーワード:新型コロナウイルス，成人看護学実習，周手術期実習，学内実習

Development of clinical practice of adult nursing under the COVID-19 state of emergency
-Report on the on-campus practice and the result of a questionnaire survey on the student nurses-

Mutsuko Ishizuka[1)], Rinne Masato[1)], Sanae Komuro[1)], Asae Yamauchi[1)], Susumu Mizuta[1)]
Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University[1)]

Abstract

In September 2021, 42 junior nursing students were supposed to take a three-week nursing practice (perioperative practice). However, due to the declaration of the state of emergency owing to the COVID-19 pandemic, the students took the practice on campus. Notably, they were unable to finish basic nursing practice in their second year. Therefore, we examined the learning contents of the practice and devised a method of development for the students to achieve the goal.

They learned in the order of intraoperative, preoperative, and postoperative, and they used methods of DVD learning, lectures, role-playing demonstrations by teachers, group work, and presentations. As a result, the students deepened their understanding and learned important points of perioperative nursing in a comfortable learning environment on campus. The achievement of the goals and satisfaction of the learning were highly appreciated by the students.

This paper reports the survey results on the learning contents and methods after the practice and the implications or possible problems in the future.

Keywords : COVID-19, Adult nursing practice, Perioperative practice, On campus training

Ⅰ．はじめに

2021年9月に3週間を予定していた成人看護学実習(周手術期実習)が，新型コロナウイルス緊急事態宣言下となり，臨地実習予定であったところ学内での実習となった．対象学生は，昨年度の基礎看護学実習2週間もすべて学内実習であったため学生の学習内容を精選し，実習目標達成を保障しなければならないと考え，展開方法を工夫した． 学習の順序は，術中・術前・術後の流れで行い，学習方法は，DVD学習，講義，教員の役割演技によるデモンストレーション，グループワークおよび発表などを取り入れた．その結果，学内の落ち着いた学習環境で，学生は理解を深め，周手術期看護の重要点について学ぶことができ，目標の達成度と満足度は，学生から高い評価を得ることができた．

実習後，学生に対して学内実習の内容・方法，目標の達成度と満足度に関するアンケート調査を行ったので，その結果と今後の課題を報告する．

Ⅱ．目的

目的は，学内実習となった成人看護学実習(周手術期実習)の展開内容・方法，並びに目標の達成度と満足度について実習後調査した学生アンケート結果について報告し，今後の課題を明確にすることである．

Ⅲ．対象と方法

１．対象

臨地から学内実習となった成人看護実習生42名中，アンケートに回答した37名(88)％

２．方法

学内実習終了時無記名式アンケート

３．学内実習期間と学生へのアンケート実施日

学内実習期間　　2021年9月6日～9月24日(3週間)

アンケート実施日　2021年9月24日(実習最終日)

４．データ収集

Google form®を利用した無記名アンケート(アンケート内容はⅤ．実習終了時アンケート内容とその結果を参照)での回答とした．

５．データ分析

選択肢は単純集計し，自由記載内容の結果は一部抜粋した．

６．倫理的配慮

本研究は，了徳寺大学生命倫理委員会によって承認され(承認番号:21-30)，アンケート実施時には，学生に目的・方法について口頭による説明を行い，個人情報保護を遵守した．アンケート回答をもって調査目的・内容を理解し同意したとみなすこと，アンケート結果は成績に関係しないこと，拒否の機会を保障することを説明した．

Ⅳ．実習概要

１．実習目的

周手術期にある成人期の患者と家族への看護を展開する.

２．実習グループと担当教員

実習病院2施設7病棟が学内となった．教員7名が1病棟ずつ学生6～7名を学内で担当した.

３．3週間のスケジュール

表1．学内実習となった成人看護学実習(周手術期)の3週間のスケジュール

1週目	月	火	水	木	金
	術中看護	**術中看護**	**術中看護　術前看護**	**術前看護**	**術前看護**
	手術部の構造設備 患者入室前の手術室内の準備と術中患者の状況 DVD視聴と講義	術中患者に行われることの根拠について調べ学習と講義	術中患者に行われることの根拠について調べたことを発表 術前患者の情報提供	術前患者の情報分析・看護問題抽出 術前オリエンテーション 教員のデモンストレーション 術前パンフレット作成	術前パンフレット作製 術前オリエンテーション パンフレットを使用し発表
2週目	月	火	水	木	金
	術前看護	**術後看護**	**術後看護**	**術後看護**	**術後看護**
	手術当日の流れ 術後ベッド作成 教員のデモンストレーション後演習	術直後の患者への看護 教員のデモンストレーション後演習	術後1日目の患者への看護 教員のデモンストレーション後演習	術後患者の情報提供・看護問題抽出 個別演習後グループワーク　全体会	術後の看護計画立案 個別演習後グループワーク　全体会
3週目	月	火	水	木	金
	祭日	**術後看護**	**術後看護**	祭日	**まとめ**
		離床の援助 実施の記録	退院指導 教員のデモンストレーション 退院指導パンフレット作成・発表		実施と評価 全体のまとめ

〈術中看護の学習〉

1週目の月曜日～火曜日

１．手術部の構造設備

昭和・平成・令和時代の手術部の構造設備について教員が過去に撮影したDVDとA病院に撮影協力していただいた画像を視聴させた.

教員が解説を加えながら視聴させ，なぜそのような環境が必要であるのかを学生達に調べさせ，作成した記録用紙（図1）に整理させた.

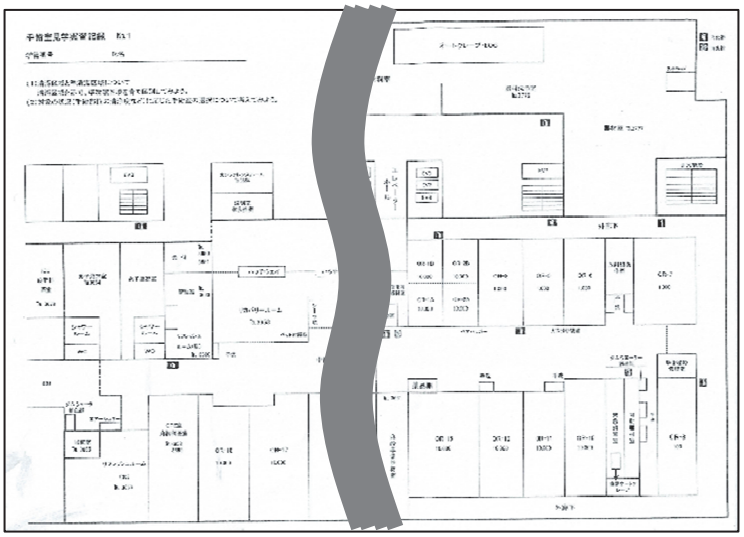


図1．手術部の構造設備の記録

2．手術部に患者が入室してくる前の準備と術中患者の状況

手術部に患者が入室してくる前にどのような準備を看護師が行うのかについて，DVD視聴によりイメージ化をはかった後，その必要性，根拠を学生個々に調べさせた．調べたことは分担して発表会で共有し，発表内容に関して教員が補足説明を加えた．

また，術中患者の状況と患者に実施されることについては科目責任者が講義を行い，作成した記録用紙（図2）に意見・感想を整理させた．

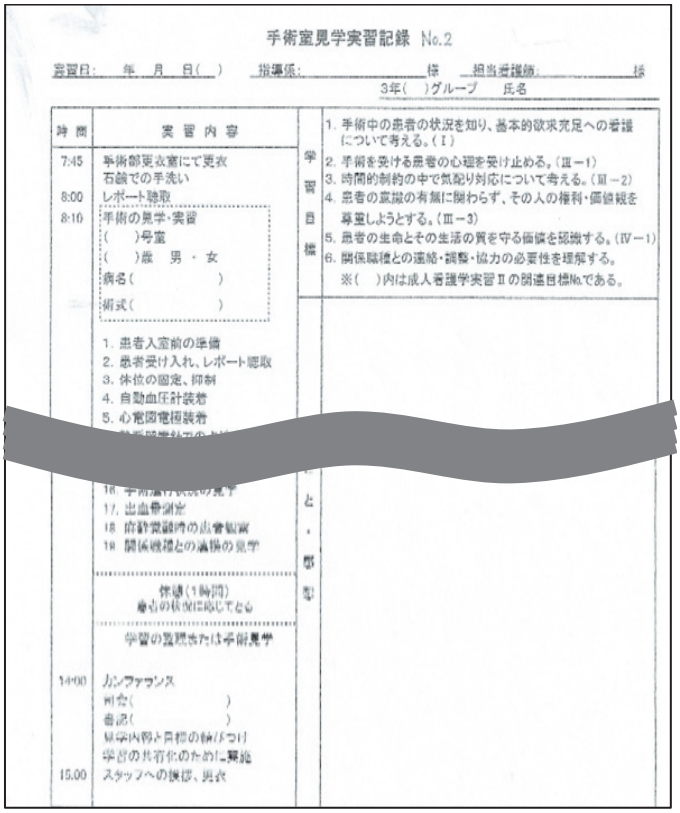


図2. 術中看護の記録

＜術前看護の学習＞

1週目の水曜日～木曜日

3．術前患者の情報提供

事前に作成した『肺がん患者の術前の情報』をA病院の4病棟の学生に各担当教員が提示（図3）し，B病院の3病棟の学生には『バセドウ病患者の術前の情報』を提示（図3）し，看護過程の展開用紙に個々に情報を整理させた．

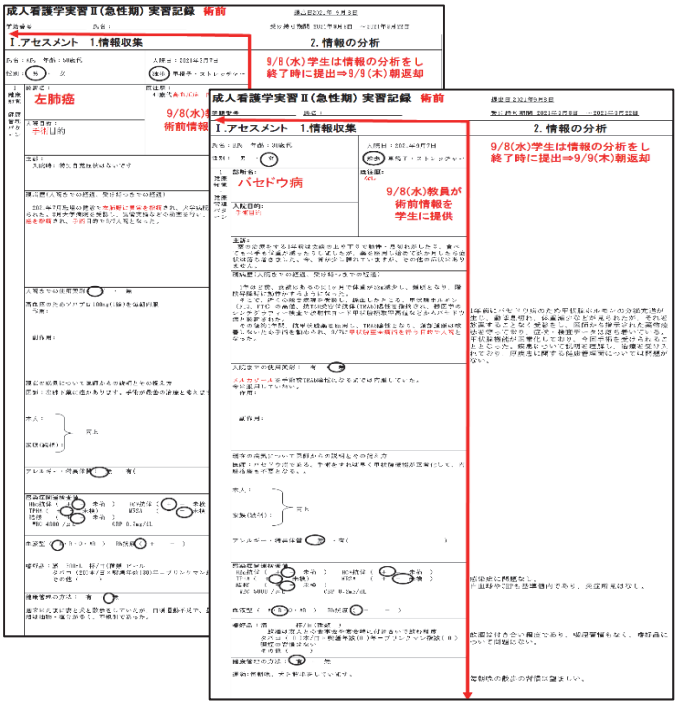


図3. 教師が作成した術前の患者情報(一部抜粋)

1週目の金曜日

４．術前オリエンテーションにおけるデモンストレーションの見学と実施

術前指導パンフレットを用いて教員が看護師・患者・家族役を演じて見せた後，各病棟グループ別に『肺がん』『バセドウ病』の術前指導パンフレットをパソコンを活用し作成させた（図4）．学生達は，必要時呼吸訓練器や胸帯なども活用し病棟グループ別に看護師・患者・家族役を演じ発表した（図5）．発表時，司会とタイムキーパーは学生が担当した．

図4．学生が作成した術前パンフレット(一部抜粋)

図5．術前オリエンテーションの発表場面

2週目の月曜日

５．術後ベッドの作成

手術当日起床時から手術部搬入までの流れと術後ベッドの作成場面（図6）について，教員が患者・家族役を演じて見せた後，学生達は病棟グループ別に実施した．

図6．術後ベッド作成の演習

＜術後看護の学習＞

2週目の火曜日～水曜日

６．手術部から帰室直後の患者状況と看護

手術部から帰室直後の看護について，教員が，医師・看護師・患者・家族に扮しデモンストレーション（図7）後，実習病棟グループ別に学生に実施させた（図8）.

図7．教員によるデモンストレーション

図8．手術部から帰室直後の患者状況と看護の演習・発表

７．術後1日目の患者状況と看護

術後1日目の患者に実施される膀胱留置カテーテル抜去などの処置やバイタルサインの測定（図9），点滴やドレーンが留置されている患者の清拭・寝衣交換をデモンストレーション後，病棟グループ別に分かれて実施させた（図10）.

図9．術後1日目の患者の処置やバイタルサインの測定演習

図10. 術後1～2日目を想定した清拭と寝衣交換の演習

2週目の木曜日

8. 術後患者の情報提供と看護問題の明確化

前述した6・7番の演習によって術後患者のイメージ化をはかった後，術後患者の情報を2週目木曜日に担当教員が学生に提供した.

事前に作成した『肺がん患者の術後の情報』をA病院4病棟の学生に各担当教員が提示（図11）し，B病院3病棟の学生には『バセドウ病患者の術後の情報』を提示（図11）した．そして，看護過程の展開用紙に情報を整理させた後，術後の看護問題を個々に考えられるだけ抽出させ，優先順位とその根拠を記録用紙に整理させた.

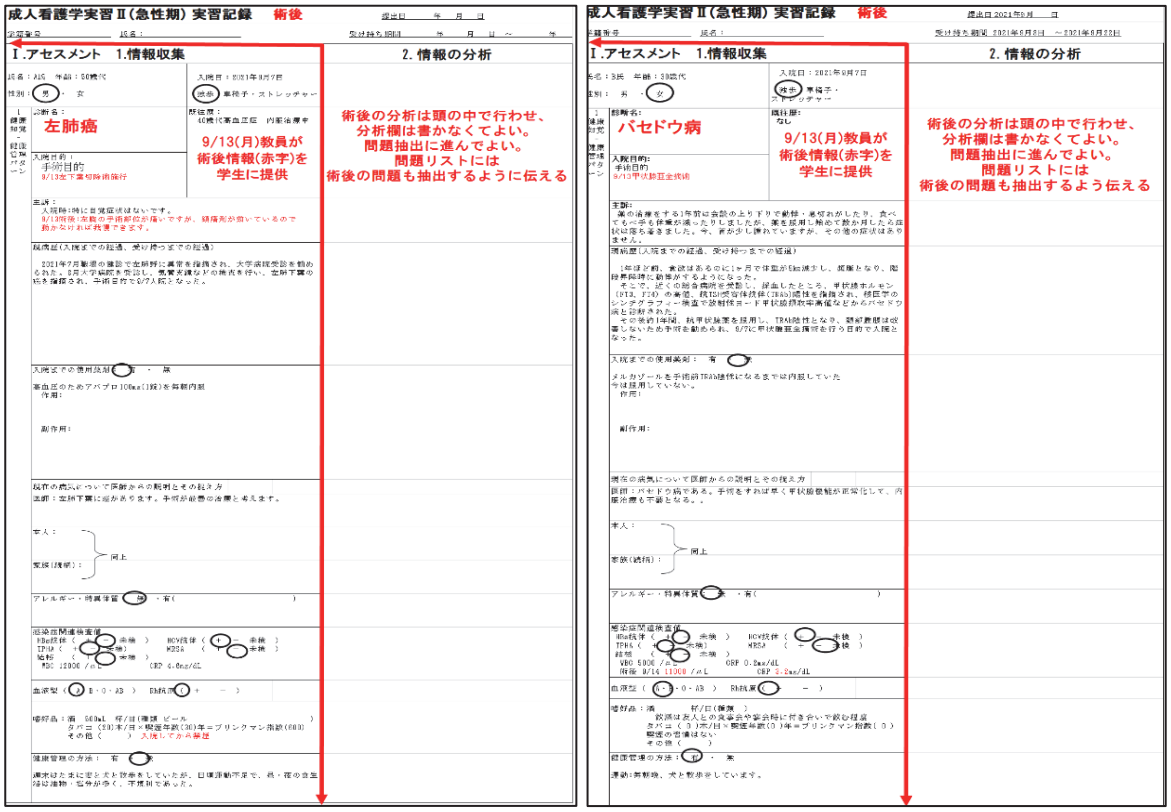


図11. 作成した術後の患者情報(一部抜粋)

2週目の金曜日～3週目の火曜日

A病棟4グループは『肺がん患者』，B病棟3グループは『バセドウ病患者』の術後の看護問題を各々約12問題ずつ抽出した．施設毎にホワイトボードに整理させ，科目責任者が全体に助言指導を行い，看護問題の明確化をはかった（図12）． 術後のため全体的には，学生から共同問題が多く挙げられていた．

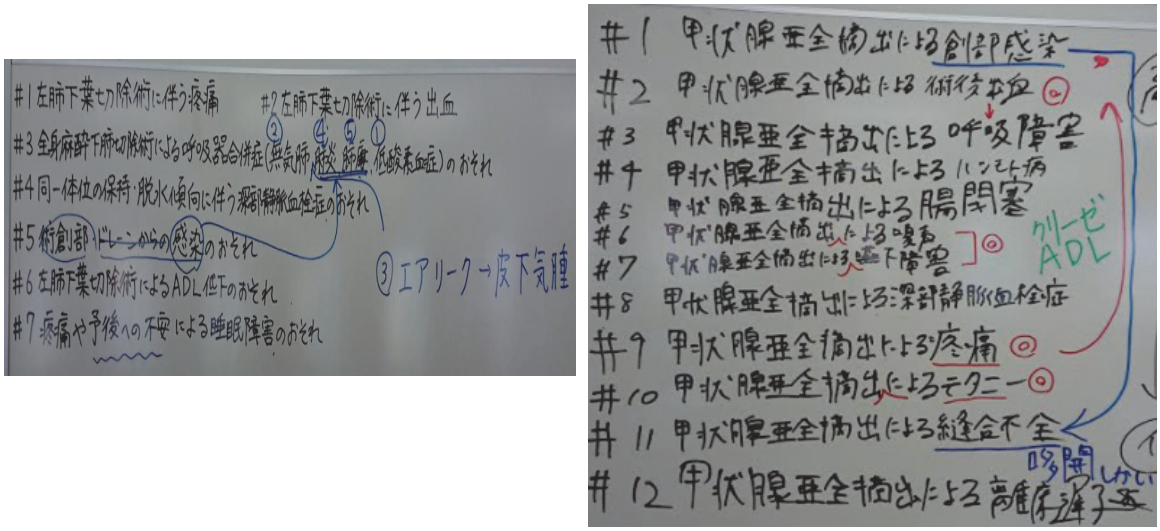


図12．学生が抽出した肺がん患者とバセドウ病患者の術後の看護問題

9．術後の看護計画立案

看護問題抽出後，病棟別に約6名の学生が各々2つの看護問題に対する術後の看護計画を立案．学生は文献学習やグループメンバーとの相談をし，担当教員の助言（図13）をもとに看護計画を立案した．

図13．看護計画についてのグループワーク

看護計画立案後，7箇所の病棟グループが，各々1台のホワイトボードに12の看護問題に対する看護計画を展示した（図14）． 用紙上の番号は学生が考えた看護問題の優先順位の番号である．

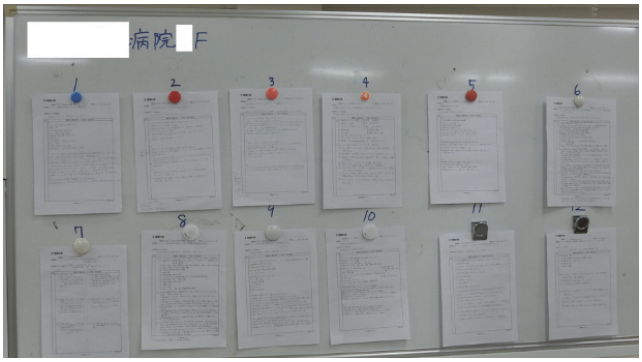


図14．ホワイトボードに掲示された某病棟の看護計画

各グループの看護計画を展示後，1グループの閲覧時間10分間とし，全グループ分を閲覧して回らせた．

閲覧したグループは，他グループの看護計画の内容に対して10分間の閲覧時間内に意見・感想を紙に書いて各ホワイトボードに張り付けることとした（図15）．

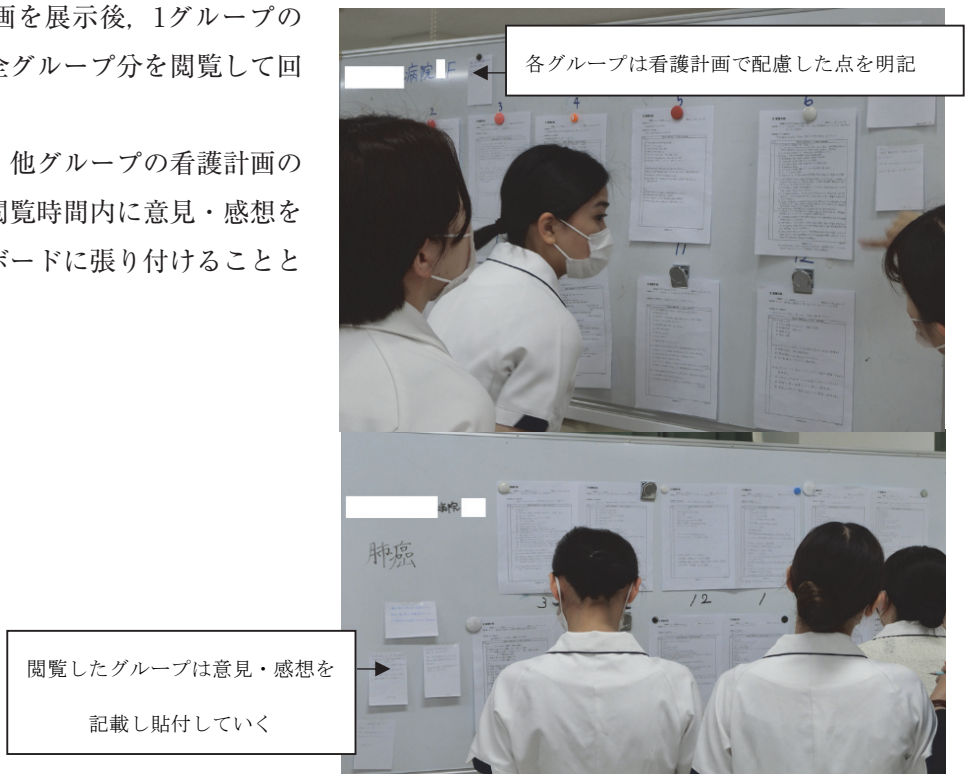


図15．各グループの看護計画を閲覧している場面

10．実施の記録

各自術後の実施場面を想定し，実施記録(SOAP) を記載し，個別に担当教員から助言・指導を受けた．

3週目の水曜日

11．退院指導

退院指導場面について，教員が，看護師・患者・家族に扮しデモンストレーション後，学生に退院指導パンフレットを作成させ，学生達も看護師・患者・家族に扮し発表した．

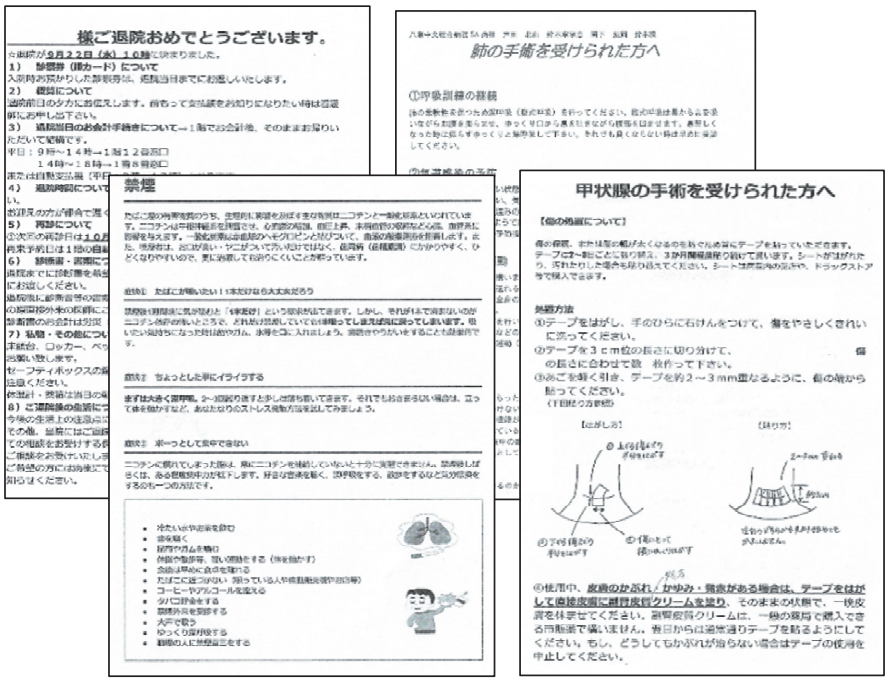


図16．学生達が考えた退院指導パンフレットの一部

3週目の金曜日

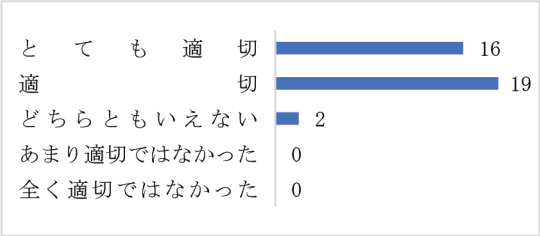
実習全体を通してのまとめとして，看護過程の展開記録の見直し，授業評価アンケート，評価表後担当教員との面談などを実施した.

Ⅴ．実習終了時アンケート内容とその結果

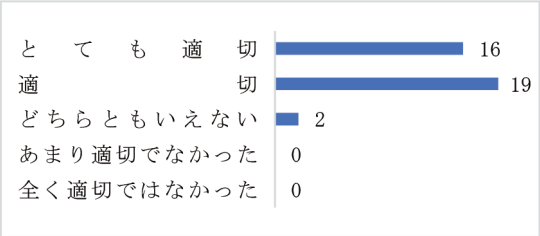
以下にアンケートの質問項目とその結果を報告する．1～15番までは5肢択一で回答を求めた結果を示す．16番はA病棟4グループが『肺がん患者』，B病棟3グループが『バセドウ病患者』の同一事例で看護過程の展開を行ったことに関する自由記載の結果を一部抜粋した．17番は，その他の意見・感想についての自由記載の結果の一部抜粋である.

〈術中看護の学習〉n=37

1．手術部の構造設備のDVDは適切でしたか.

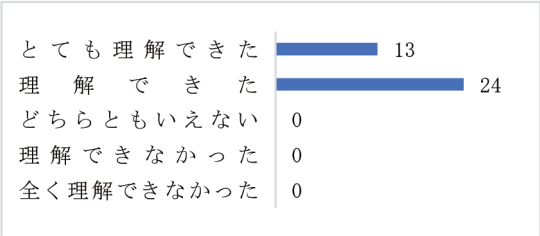


2．患者入室前の手術室の準備と術中看護(DVD,講義,課題学習,発表)の学習は適切でしたか.

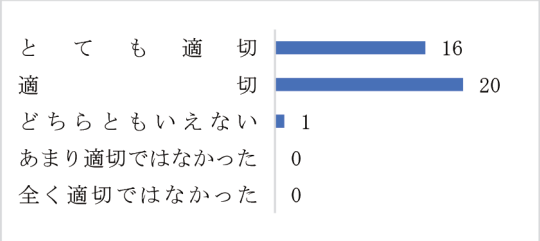


〈術前看護の学習〉

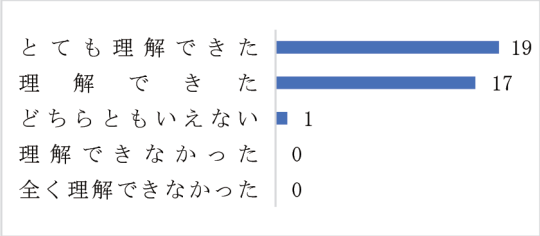
3．術前患者の情報提供,分析,看護問題抽出は理解できましたか.



4．術前オリエンテーションの学習方法(デモンストレーションと病棟毎のパンフレット作成・発表)は適切でしたか.

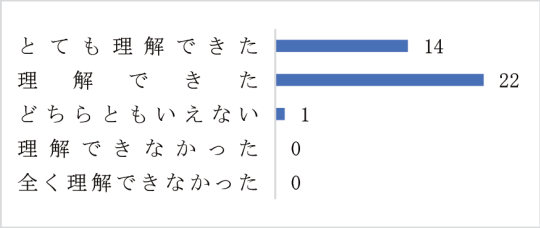


5．術当日の流れと術後ベッド作成(デモンストレーションと病棟毎の発表)は理解できましたか.

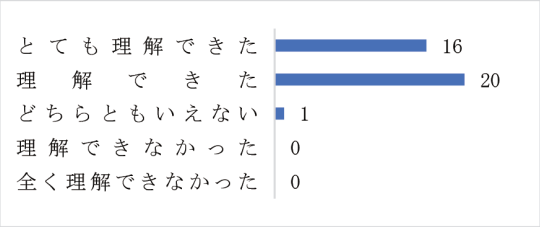


〈術後看護の学習〉

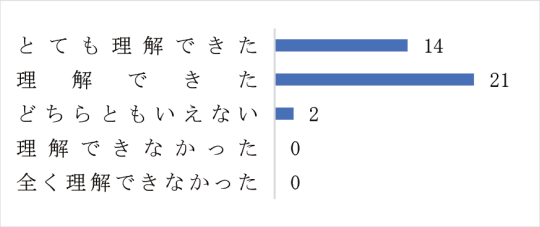
6．手術部からの帰室直後の看護(教員のデモンストレーション後,病棟グループ別に実施)は理解できましたか.



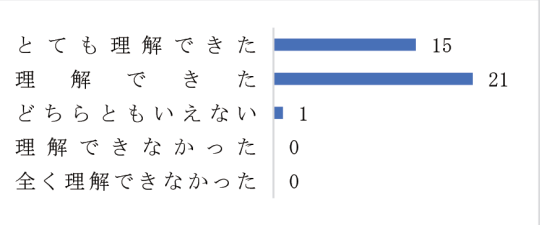
7．術後1日目の看護(膀胱留置カテーテル抜去,点滴やドレーンが留置されている患者の清拭・寝衣交換をデモンストレーション後,実施)は理解できましたか.



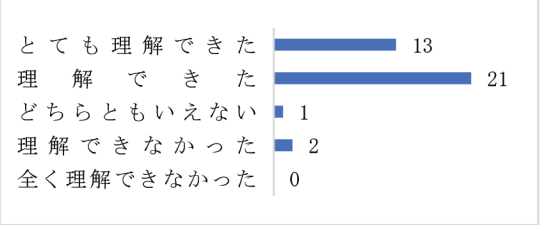
8．術後患者情報の提供,術後の看護問題抽出と優先順位の発表は理解できましたか.



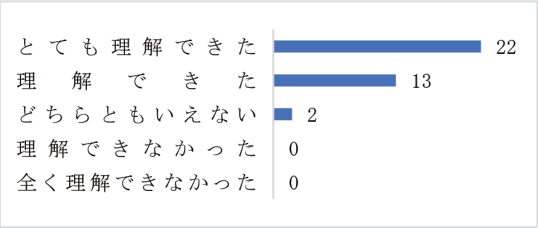
9．術後の看護計画立案は理解できましたか.



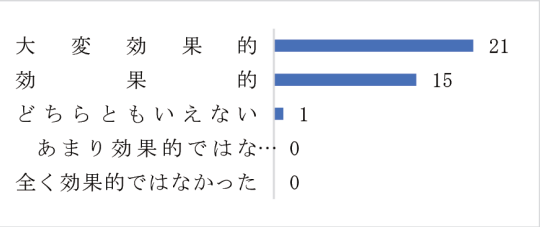
10．実施の記録(SOAP) は理解できましたか.



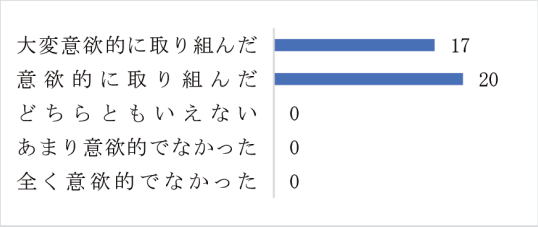
11. 退院指導(教員のデモンストレーション後,病棟毎にパンフレット作成・発表) は理解できましたか.



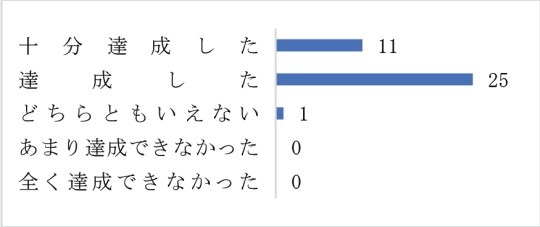
12. 実習中のグループワークは効果的でしたか.



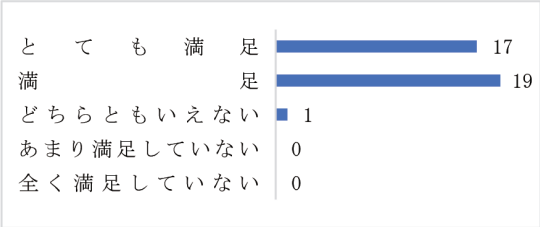
13. 実習に意欲的に取り組みましたか.



14. 実習目的・目標の達成度



15. 実習の満足度



〈全体を通して〉

〈記述式回答〉

16. 病院別に同じ事例を展開したことについて，意見や感想を記載してください.

・グループで同じ事例を展開したことによって，各自が考えたものを統合することが出来たと感じる．それによって，自分と違う考え方を学習し，吸収することができた．また，わからない事があった時に質問・相談することができたり，術前・術後パンフレット，オリエンテーション等にグループで取り組むことが出来たので，理解が深まったと思う.

・グループで同じ事例を展開することで多様な視点からの意見が多くあげられより事例に対する情報の分析化が詳しくなったように感じられました．グループでの話し合いはとても有意義であったと思います.

・グループで同じ事例を展開することにより，わからないところは相談して意見交換をしながらやることができたのでよりよい看護過程を展開することができたと思う.

・グループメンバーそれぞれの考えと自分の考えを共有することで自分で気づけなかったことや違う視点からの考えが出てより内容の濃いアセスメントや計画ができた.

・同じ事例だったので話し合いを通じて自分では思いつかない援助や他の人が考える優先順位の根拠を学び違う視点で学ぶことができました.

・同じ事例でも人によって展開の仕方が違ったりして他の意見を聞くことができた．また自分の意見も発言することができ，一つの事例からたくさんのことを学べ，知識が増えた．　　など

17. その他，この実習に関する意見・感想を記述してください.

・術前カンファレンスや退院カンファレンスを見たことしかなかったため，実際に自分で作り，患者さんに説明できたのは凄くよかった．様々なグループの発表を聞くことで，伝え方，話し方，説明の仕方，注意しなければいけないことが見えてきた．
・今回は学内実習になってしまったけれど，術前オリエンテーションや退院前オリエンテーションで実際に自分がやってみたり，看護技術や看護過程をゆっくり時間をかけて行うことができて，臨地に行けなかったからこそ，学べる部分も多かったし，手術部の構造や準備についても詳しく知ることができて実りある実習になったと思う．次，臨地に行く際の練習にもなったのでとてもよかった．
・臨地実習ではなかったが，周手術期にある患者さんの実際を理解することができたし，看護過程の展開も細かく行うことができたので充実した実習になった．
・今回実際に手術室に入ることができなかったり，患者と触れ合うことができずにとても残念でした．グループワークが多かったためグループのみんなと仲良くなることができたので嬉しかったです．
・今回は学内であったため分からなくても先生や友達が優しく教えてくれたが，本来であれば実際に病棟で看護師さんと患者さんを目の前にしている為，分からないは通用されないと思った．先生や友達のありがたみがとても感じられた実習であった．もっと自分の学力の力をつけていく必要があると感じた．
・臨地に行くことができなかったのは残念だが，学内でも周術期に関する知識を身につけることができたと感じる．
・グループで意見を出し合うことは大事だと思った．最初は，間違っていたらいやだなと思うことが多く，人に任せることがあったが，段々グループとの仲を深めていくことができ，最後のカンファレンスでは司会を務めさせてもらい，自分でも成長した部分があってよかった．　など

Ⅵ．考察

今回コロナ禍の影響を受け臨地から学内実習となった成人看護学実習Ⅱ(周手術期実習)の3週間の学習目的・内容は，術中看護，術前看護，術後看護の流れで展開させた．その流れに沿って実習終了時学生によるアンケート結果をもとに考察していきたい．

まず，術中看護の学習について考察する．手術部の構造設備や術中看護のDVD 視聴については，『とても適切』『適切』が35/37名（94.6％）を占めており，効果的であったと考える．　学内となったため昭和・平成・令和時代の変遷と術中看護の根拠を含めてじっくり全員にDVDを視聴させ説明することができ，手術部のイメージ化の促進と手術部患者状況や手術部看護の役割について理解を促すことができたと考える．昭和と平成のDVDの画質が劣っていたのが残念ではあったが，学生達からその点の指摘はなかった．

次いで，術前看護について，術前患者の情報提供，分析，看護問題抽出については，『とても理解できた』『理解できた』と37名（100％）の学生が回答していた．肺がん・バセドウ病患者のいずれも術前の全身状態がほぼ問題ない事例設定にしていたので，術前の問題抽出の面では，教員が期待していた“手術に対する不安”の問題を導き出せた．その不安に対する計画と実施では，36名（97.3％）の学生が『とても理解できた』『理解できた』と回答していた．学生達に術前オリエンテーションのグループワークと発表をさせたが，事前にサンプルとなる術前指導パンフレットを配付し，教員が看護師・患者・家族役を演じて見せたので，臨地の場のような緊張感が緩和されており，教員たちの役割演技が学生には面白くも感じられ，理解につながったようであった．

術後看護の学習に関しては，手術当日の流れと術後ベッド作成を行ったことについて，36名（97.3％）の学生が『とても理解できた』『理解できた』と回答しており，教員たちが患者・看護師・家族・看護学生に扮してまず演技をして見せた後，すぐに実施させたことが理解につながっている．但し，臨地の場では，決められた時間に正確に行うことが求められるため，その点は課題が残る．

手術部から帰室した直後の患者状況は，教員たちが患者・看護師（複数）・医師・家族・看護学生役に扮してまず演技をして見せた後に実施させ，36名（97.3％）の学生が『とても理解できた』『理解できた』と回答していたが，実際には疼痛や出血等が予測される術直後の患者に対してどれだけ迅速・正確・安全・安楽に技術を提供できるかは，現場での意図的経験の必要性を強く感じる．術後1日目の看護（点滴やドレーンが留置されている患者の清拭や寝衣交換他）についても教員のデモンストレーション後に実施させ，36名（97.3％）の学生が『とても理解できた』『理解できた』と回答していたが，学生の演習場面を見ると安全・安楽をふまえて効率的に実施するという点では，繰り返しの訓練の必要性を感じた．術後看護の学習においては，術当日から術後間もない時期の患者のイメージ化をはかった上で，複数グループが同一事例（肺がん・バセドウ病患者）の術後患者情報を教員から提示され，看護問題の抽出を行い，35名（94.6％）の学生は『とても理解できた』『理解できた』と回答していた．その学習に関する記述式回答16番の結果をみると「自分と違う考え方を学習し，吸収することができた」，「わからない事があった時に質問・相談することができ，理解が深まった」「多様な視点からの意見が多くあげられより事例に対する情報の分析化が詳しくなった」，「考えを共有することで内容の濃いアセスメントや計画ができた」，「1つの事例からたくさんのことを学べた」などの意見が寄せられていた．学習方法として，複数グループが同一事例に取り組んだことは，視野の広がりや事例の理解の深まりにつながっていた．このことは，渡邉美和ら（2021）の「ブレンディッドラーニングを取り入れた周手術期実習の取り組み」[1)] でも同様の学生評価を得ている．ただ，術後の看護については，看護過程の特徴として問題点にのみ着目する傾向があるため，問題のない点についても患者をとらえる事が大切であることや，共同問題が多く抽出される傾向があるので，患者の生活についての自立度に応じた計画と実践の必要性についても助言した．術後の看護計画立案は36名（97.3％）の学生が『とても理解できた』『理解できた』と回答していたが，前述した患者の状況を踏まえて計画立案させていくことが求められる．術後の実施記録については，問題解決志向型のSOAP形式で書かせたが，これについては2名の学生が『理解できなかった』と回答していた．理解不十分な学生を教員がとらえて指導を工夫する必要があったと考える．術後の退院指導については，35名（94.6％）の学生が『とても理解できた』『理解できた』と回答していた．実習1週目に術前オリエンテーションの演習経験をしていたこともあり，また事前にサンプルとなる退院指導パンフレットを配付し，教員が看護師・患者・家族役を演じて見せたこともあって，全体的に術前オリエンテーションの時以上に上手く発表できており，コミュニケーション能力が高まっていたと感じた．

今回臨地実習が学内実習となったことのメリットとしては，全員に意図的な周手術期看護の習得がはかれ，学生の学習体験の差を最小限にとどめられたことが挙げられる．全員が術中患者状況を把握し，それをふまえて手術前後にどのような看護が必要になるのかという順序性で学習を進めていくことができた．例えば，臨地においては必ずしも全員が術直後の場面などに遭遇できるわけではないが，今回は，全員に学内で想定した術直後場面を演習できるなど，学習内容の均一化がはかれた．また，全員が術中看護を学んだ上で術前と術後の重要点を足並みをそろえて学んでもらうことができた．そして，学生の反応を見ながら，学習の理解度や進み具合に応じて，学習進度・方法を変更することも可能であった．臨地実習に比

べれば多少緊張感を緩和しながら学べたという利点もあった．終了時学生アンケートで36名（97.3%）の学生が『とても満足』『満足』と回答してくれたことは，効果的学習ができたことの一つの評価と考える．しかし，臨地では学生に緊張感があるからこそ学習の吸収力が深まり，学習の定着化がはかられることがある．実体験を通して実感として学生の心が揺さぶられ，日々変化していく周手術期患者の反応を生でとらえる難しさを感じながらも，患者の反応をとらえられたときや援助して回復過程に寄り添えた時の喜びもある．また，患者や医療者等との関係性に悩み努力し，その中で人間関係能力が成長していく機会がある．そのように臨地実習の強みは果てしない．学内実習の限界がそこにあることを私たち教員は心して，コロナ禍においての効果的学習方法を模索していく必要がある．

Ⅶ．まとめ

2021年9月の3年次成人期看護学実習(周手術期)の3週間は，新型コロナウイルス緊急事態宣言下で学内実習となった．そこで，実習目標を達成するために手術中・前・後という順序性で学習内容を組み立て，学習形態として，DVD学習，講義，教員たちの役割演技によるデモンストレーション，グループワークと発表などを駆使し，学内実習を実施した．その結果，学内という落ち着いた学習環境で，学生の反応に応じながら周手術期看護での重要点を学ばせることができ，実習後の学生アンケートで，目標達成度と満足度は高い結果を得ることができた．

しかし，術直後から回復期にかけて患者が大きく変化する時期への対応力やコミュニケーション能力の育成は，やはり臨地実習での経験に勝るものはない．臨地での強みを如何に学内実習となった場合にも盛り込んで教育できるかという力量が私達教員には問われる．学内実習の効果と限界をふまえ，コロナ禍においての効果的学習方法を模索し，コロナの収束を願いながら学生への教育を今後も支援していきたい．

利益相反

利益相反に相当する事項はない．

引用・参考文献

１）渡邉美和，香川将大，岡本佐智子（2021）ブレンディッドラーニングを取り入れた周手術期実習の取り組み，看護展望，46（9），143-145.

２）小園千草，武藤英理，岩﨑淳子ほか（2021）新型コロナウイルス（COVID-19）感染症対応のため遠隔実習となった成人看護学実習（急性期）の教育の質を維持する取り組み，朝日大学保健医療学部看護学科紀要，7，21-25.　３）大阪府看護協会（2021）コロナ禍において安全で安心して臨地実習を実施するための基本指針，メディカ出版.

2021年12月17日　受理

了徳寺大学研究紀要　第16号